The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	批判的地域主義と地域学の可能性 ： 兵庫県北部における交流と交渉の地域調査
Author(s)	ギンナン, アレクサンダー
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2018, 52, p. 57-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76085
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

批判的地域主義と地域学の可能性

――兵庫県北部における交流と交渉の地域調査――

アレクサンダー・ギンナン

キーワード：批判的地域主義／地域学／香美町／鄭煜璋／文化交流

> 地域を考えるということは、無限のつながりがある地球空間の中からある部分を一つの意味ある関連したものとして、主体の側で、積極的に切り取っていく行為だということができる。そうするには、基準が必要である。いいかえれば、思想、ないしビジョンが必要になるのである。
>
> 和田春樹[1)]

> …地域学の可能性はたぶん、故郷への問いを抜きにしては語り抜くことができないだろう。あたらしい地域をめぐる物語やイメージを創出することなしには、地域学のあらたな地平が切り拓かれることはありえない…
>
> 赤坂憲雄[2)]

冒頭に掲げた2つの引用文は、一見、不思議な組み合わせと思われるかもしれない。いずれも「地域」という概念について論じているが、歴史学者、和田春樹にとってそれは日本という国の枠を越え、「東北アジア」における和解と協力の共同体を実現するための視座である。一方、民俗学者、赤坂憲雄にとっての地域は、日本国内の「東北地方」という特定の場所を意味する。つまり、前者が巨視的に地域を捉えているのに対して、後者は微視的なレベルにおいて地域を解釈している。どちらの視座が正しいのかというよりは、

両方を同時に考えなければならないのである。しかし、それは必ずしも容易ではない。いうまでもなく、特定範囲の地域に焦点を当てるということは、その範囲内の特徴を目立たせると同時に、その範囲の外との繋がりや関係性を見えなくしてしまう危険性がある。一方、普遍性の理念のもとに連続性や同質性を過度に強調すると、逆に、特定範囲の地域における特別な事情や状況が見落とされるリスクが生じる。

1983年に建築史家ケネス・フランプトンは、建築における「普遍的文明のインパクト」と「個別的な場所の特色」の対立を媒介する方法として批判的地域主義という概念を提起した。[3] フランプトンは、ポストモダニズムが台頭する中、普遍性と地域性の相互的脱構築を通じて上述のような二重拘束に抵抗することを目指していたのである。それ以降、批判的地域主義は建築以外の文脈において言及されるようになったが、その批判的性質の可能性についての議論は次第に薄らいで行き、現在は頓挫している。

本稿では、フランプトンの理論の新たな展開をはかるために、筆者が携わった地域を対象とした教育（地域学）プロジェクトと、その一環で調査した兵庫県北部に設置してある韓国の彫刻家鄭煜璋（チョンウックチャン）（1960-）の作品《1400年後の再会》を中心に考察を試みる。[4]《1400年後の再会》は、1992年に現在の香美町（旧村岡町）で開催された国際彫刻シンポジウムの成果のひとつであり、その題名は1400年前に遡る朝鮮半島との交流と交渉に言及する。この文化交流のテーマから冒頭で掲げた地域という概念を巡る普遍性と特殊性の矛盾を解決するための糸口を探りたい。鄭煜璋の作品そのものは解決方法を見出すに至っていないが、批判的地域主義を踏まえてこの事例について検討することにより、地域という視座と地域学の可能性が開かれるのである。

1. 批判的地域主義に即した地域へのアプローチ

批判的地域主義という概念は、建築の文脈で初出した造語であり、ケネス・フランプトンの論文「批判的地域主義に向けて—抵抗の建築に関する六つの

考察」（1983）によって他分野へ普及した。[5] フランプトンによると、近代化の結果、どの先進国の都市も同じ高層ビルと高速道路で構成されるようになり、かつて進歩的あるいは敵対的であった前衛芸術と、個々の国々の「世界文化」（民族文化）もポストモダニズムによって単なる装飾の技術に退行してしまった。[6] 彼は、このような「普遍的文明」に抵抗するための戦略として、地域に根ざした「後衛主義」の必要性を訴える。それが保守的な地域主義に陥らないためには、批判的地域主義として「普遍的文明」を批判しながら、「世界文化」も脱構築しなければならないと説明する。[7] この二重の媒介過程の事例として、フランプトンはデンマーク、コペンハーゲン市の郊外にあるバクスバート教会に焦点を当てる。教会の外見は、一般的なコンクリートの礎石と壁面で構成されているが、礼拝堂の丸天井は高度に複雑な形状となっているのである。中国の仏塔にしか見られない天井の形式を用いることにより、建物について一元的な西洋的あるいは東洋的な解読が不可能となり、教会の最も聖なる空間が世俗化される。[8]

フランプトンは、教会が異文化（非キリスト教）の要素を取り入れながら、キリスト教徒の拠点として成り立っていることに着目する。教会の信者がどこまで丸天井の異質性を認識しているのかについては疑問が残るものの、フランプトンにとっては、このような逆説的な状況にこそ批判的地域主義の可能性が潜在するのである。

建築の分野以外で批判的地域主義について議論している例として、ジェンダー理論家ジュディス・バトラーと文芸評論家ガヤトリ・C・スピヴァクの著書『国家を歌うのは誰か？グローバル・ステイトにおける言語・政治・帰属』（2007）が挙げられる。[9] 本書において二人の理論家は2006年にアメリカの国歌がスペイン語で歌われた事例を中心に批判的地域主義について検討する。バトラーとしては、アメリカ国歌が不法滞在者の街頭デモで「ヌエストロ・ヒムノ」（我らの歌）として歌われたことは、国民の複数性や多様な帰属形態を巡る問題を提起するのである。[10] 一方、スピヴァクは、スペイン語で歌われるアメリカ国歌の意義が多言語地域の実現可能性を示すことにあるの

ではなく、国家をナショナリズムに汚染されない抽象的構造に創り直せる可能性を表していることにあるという。[11)]国家の圧力は依然として強いものの、グローバル化の結果、国民国家は衰退している。いわゆる自由市場は、グローバルに統制された優先事項を携えて機能するため、脆弱な国家経済は持続的搾取の対象となる。スピヴァクは、このようなグローバル資本の動きに抵抗するためには、抽象的構造としての批判的地域主義が必要だと述べる。[12)]しかしながら、バトラーと批判的地域主義の具体的なあり方について決着がつかないまま、『国家を歌うのは誰か？』の対話は終了する。

スピヴァクは、翌年に出版した*Other Asias*（2008）においても批判的地域主義について取り上げている。[13)]著書の題名が示すとおり、批判の対象となる地域はアジアであり、それはひとつのアジアではなく、複数状態を前提とする「不可能な大陸」である。スピヴァクは、アジア大陸を構成する複数の差異を知り、尊重し、そこから地域主義を目指すという不可能な作業こそが人文学の役割であると述べる。[14)]フランプトンがバクスバート教会というひとつの建物を中心に地域主義を検討していたのに対し、スピヴァクは、アメリカやアジア大陸という大規模な単位を扱っている。しかし、いずれの理論家も、ひとつの単位（地域）の中の複数性について論じている点で共通する。

非英語圏では、韓国の現代史研究者、白永瑞（ペクヨンソ）は著書『共生への道と核心現場―実践課題としての東アジア』（2016）において批判的地域主義について言及する。[15)]白永瑞は、朝鮮半島の分断、中国と台湾の両岸関係、沖縄と日本の関係などの小分断を「核心現場」として捉えており、これら周辺とされている場所から東アジアの分断構造（国家間の分断）の克服への道を探る。[16)]その手掛かりとして、個別性の普遍化と普遍性の個別化を同時に確立させるための様々な二重の視座を模索し、特定の場所を重視しつつ、閉鎖的な地域主義に埋没しない方法を追求する。白永瑞が考える批判的地域主義は、東アジアの思想的・実践的資源に対する不断の理論的更新を求める姿勢である。[17)]前述の理論家と比較すると、白永瑞は批判的地域主義の具体的な内容についてあまり詳しく記述していない。その代わり、小規模な地域単位を出発点とす

る「地球地域学」の構想を立てている。

白永瑞は、地球地域学を地球的に思考しながら地域に根ざした学問、または地方的（ミクロ）なもの、地域的（メソ）なものと地球的（マクロ）なものを一つの次元で結合し分析する学問と定義している。[18] これは、特殊性にとらわれない地域へのアプローチとして提示されている。白永瑞の目的は、「韓国学」や「中国学」など国家単位に基づく研究領域の地球地域学としての可能性について検討することである。その過程の中で小規模な地域に着目し、韓国の事例として「仁川学」を紹介する。白永瑞によると、仁川学は郷土主義や地方主義をもって構成されるものではなく、東アジアをひとつの統合的思惟単位として設定した地域主義を軸に、仁川と東アジアの港を一つのものに連結して思考する取り組みである。[19] 仁川学はまだ宣言の段階にあるものの、白永瑞が引用する文学研究者、崔元植（チェウォンシク）も「批判的地域主義としての仁川学」などの文言を使用しているのは興味深い。

次いで二番目の事例として、白永瑞は台湾（中華民国）の金門島に基盤を置く「金門学」について紹介している。白永瑞が金門学に関心を持つ理由は2つあり、そのひとつは金門島の曖昧な所属に関係する。中国（清朝）に属していた金門島は、1949年以降の共産党と国民党の国境線戦闘により、台湾の中華民国領土に編入された。[20] しかし、金門島はそれ以前から東南アジアに赴く華僑の輩出地でありながら閩南文化の中核をなしていたため、一国的視座には納まらない地域である。さらに、白永瑞は近年金門島でベトナム人女性の国際結婚による移住者が増えていることにも注目し、このような事例について研究することは韓国の農村における多文化主義の理解にも繋がるという。[21] つまり、地球地域学の趣旨は、ミクロな地域単位を研究対象としても、東アジアの分断構造を克服するための普遍的な要素を地域の中から探し出せるということである。

日本における地域学には、20世紀初期に言語学者、伊波普猷が立ち上げた「沖縄学」のような特定地域に根ざした学際的な学問の影響、1954年にアメリカの経済学者、ウォルター・アイサードが地域経済の問題を中心に雇

用、産業、交通などの分析を通じて政策提言するために発足した「地域科学」の側面、1970年代後半に日本の不況の中、全国一律の国土開発政策への反発として各地で行われるようになった生涯学習と住民主導のまちづくりとしての次元など、多様な要素が含まれている。[22] また、地理学者、山川充夫が説明するように、日本の大学における地域学の基本理念としては、グローカル、問題発見・解決、地域貢献、フィールドワークなどがほぼ共通して掲げられている。[23] 一方、経済学者、岡田知弘が指摘するとおり、地域学の教育内容・方法、住民や自治体との組織的連携のあり方などは、多くの大学では未だ模索の段階にある。[24] その結果、地域学は一概に定義や評価できるものではない。個々の研究者・実践者によってその意味と意義が左右されるのである。

批判的地域主義と地域学は、いずれも地域という概念を軸にしているにもかかわらず、白永瑞による地球地域学の構想以外は、この2つの考えを掛け合わせる試みは未だ皆無に等しい。次節においては、筆者が携わった地域学プロジェクトの事例から以上のような理論を実践する上での可能性について検討したい。

2. 兵庫県北部での地域調査と鄭煜璋の《1400年後の再会》（1992）

かつて、兵庫県北部の但馬地方に、村岡町という1000メートル級の山々に囲まれた町があった。2005年に、村岡町は隣接している香住町と美方町と合併し、香美町として生まれ変わった。香美町の合併当時の人口は2万1439人であったが、2015年現在は1万8070人に減少している。[25] 2014年に香美町は、日本の人口減少問題について政策提言している日本創成会議により、「消滅可能性都市」のひとつに指定された。一方、旧村岡町にある兵庫県立村岡高等学校は、2011年に学校の特色付けと生徒の確保を目的として「地域創造類型」という教育プログラムを創設し、地域について調査・研究する学習を行っている。[26] 筆者は、2016年度から高校生15名の地域調査プロジェクトを担当することになり、これまで論じできた地域への微視的かつ巨視的

な視座の両立と実践の問題に直面した。準備の段階で様々な可能性を模索していた際、学校の周辺に彫刻の設置を通じたまちづくり事業の作品があることを知り、地域に根ざした教育と芸術の両方の観点から「地域」という概念について考えるようになった。

1992年に、村岡町は日本を含む6か国から9人の彫刻家を招き、国際彫刻シンポジウムを開催した。[27] 彫刻家は7月17日から9月17日にかけて町内に滞在し、住民と交流しながら主に地元の石（斑糲岩（はんれいがん））を使用して作品制作に取り組んだ。[28] シンポジウムという言葉の語源は、ギリシャ語で知的な談論を興じた祝宴を意味し、英語では一般的に談話会や討論会などを指す。そのため、「彫刻シンポジウム」という表現は誤解を招く場合もあるが、この名称は複数の彫刻家が特定の場所に一定期間集合し、作品を公開制作するイベントを示すのである。[29] 彫刻シンポジウムの歴史について論文をまとめた彫刻家、鈴木徹と井田勝己によると、世界初のシンポジウムは、1959年にオーストリアの採石場で開催され、日本での最初のイベントは1963年に神奈川県真鶴・道無海岸で開催された。[30] 初期段階の彫刻シンポジウムは作品制作を中心とした作家のためのイベントであり、都市計画や地域活性化の事業ではなかった。後者のような行政主導の彫刻設置事業は70年代後半から日本各地に普及した。

村岡町の国際彫刻シンポジウムの場合は、当初から彫刻を用いた公園を建設するために開催された事業であり、9人による作品は、村岡区福岡にある小高い丘（八幡山）の先端に設置されることになった。村岡町からこの事業の委託を受けたランドスケープ・アーキテクト、長谷川弘直のコンセプトは、各彫刻を個別の作品として強調するのではなく、ひとつの空間を造ることであった。[31] したがって、作品の題名や作者の名前などの情報は公園内で一切表示されていない。

景観学者、竹田直樹によると、1990年前後に竹下内閣が地域振興のために各自治体に交付した1億円の「ふるさと創生基金」で、過疎化に悩む田園地域の一部は、彫刻設置事業を通じたまちづくりに取り組むことになった。[32] 彫刻設置事業には様々な種類や方法があるものの、そのなかで特にシンポジ

ウムの開催は主催する地域にとって有利に働くと思われた。[33] それは、彫刻シンポジウムを主催することにより、設置対象となる彫刻を安価に入手できると同時に、作品制作風景の公開イベントも開催できるというおまけも付いたからである。また、石材業を地場産業とする地域にとって、石彫刻の制作は産業振興に繋がると期待された。実際に、村岡町の国際彫刻シンポジウムでは、八幡山の頂上における約0.5ヘクタールの面積の整備に、地域総合整備事業債約4億円（内訳は起債約3億円、一般財源約1億円）を充当し、彫刻の素材として町内から産出する斑糲岩を約1000トン使用した。[34] そして、地元の石工・石材・建材業者は、彫刻家の作品制作に加わることとなった。[35]

八幡山は、森の茂った高さ約41メートルの尾根である。公園が整備された先端の北側には竣工前から広場と遊園地があった。中央には、江戸時代に造営された八幡神社があり、神社より南には5世紀後半から6世紀前半の古墳群が残っている。また、南側には貯水施設もある。国際彫刻シンポジウムの翌年（1993年）の11月23日から12月3日にかけて村岡町は比較的小規模の彫刻フォーラムを開催し、日本からの3人の彫刻家による斑糲岩の作品が八幡山の古墳群の周りに設置された。[36]

八幡山公園の彫刻について知識を深めるために、地元の高校生たちは、国際彫刻シンポジウムにかかわっていた旧村岡町の元職員と一緒に公園を視察した。次に、シンポジウムの関連資料に参加者の名前が記載してあったため、生徒はそれぞれの連絡先を調べ、県外・海外に在住する彫刻家との文通を通じて作品や当時の経験について質問した。[37] また、日本に在住する彫刻家を県外へ訪問し、聞き取り調査も行った。[38] つまり、地元の公園における作品について知るために、県外・海外まで調査を広めた。そうすることにより、生徒が持つ地域の認識が、狭い閉じた概念ではなく、ひとつの地理的拠点で交差する様々な繋がりや関係性として理解されることを期待していた。

その期待通り、参加した彫刻家から得た情報は、作者と作品のみならず、八幡山公園とその周辺地域が持つ他地域との関係性について学ぶきっかけとなった。殊に、韓国の鄭煜璋（チョンウックチャン）（1960-）からの情報と彼の作品《1400年後の

再会》【図1】は特筆に値する。80年代後半から活動している鄭煜璋は、銅、ミクストメディア、針金、アルミニウム、ステンレスなど様々な素材を活用し、抽象、半抽象、具象の作品を創作する造形作家である。1992年に村岡町で制作した高さ360cm、横幅1400cm、奥行き800cmの《1400年後の再会》は、今もなお彼の一番大規模な作品として際立っている。

作者によると、シンポジウムの参加者として村岡町に滞在しながら創作していたため、地域との関係性を意識した作品を創ったとのことである。[39]鄭煜璋は、八幡山にある5世紀後半から6世紀前半に築造された古墳群が朝鮮半島より伝わった技法を用いていることを知り、日本と朝鮮の交流と交渉をテーマに作品を制作することにした。国際彫刻シンポジウムの作品は、基本的には地元の斑糲岩を使用しているが、《1400年後の再会》は八幡山における歴史を反映するために村岡の石材と韓国から輸入した花崗岩の組み合わせで構成されているのである。[40]また、公園の中央に神社があることに因んで、作品は2つの門を連想させる形になっており、その梁は親善を意味して跨るように

【図 1】 鄭煜璋《1400 年後の再会》1992 年（2016 年 7 月筆者撮影）

制作されている。そして、《1400年後の再会》の題名は、鄭煜璋の国際活動が古代の八幡山にあった日朝文化の出会いと重なることに言及する。地域に根ざした作品であると同時に、国境を越える歴史との関係性を強調している。

八幡山公園の古墳群についての最も古い調査記録は、但馬地方で長く考古学研究に従事していた山根武による1948年の著書『兎塚地方に於ける古墳の研究』である。本書によると、築造当初は陪塚を含めて9基の古墳が存在していた。その後、江戸時代に八幡神社の造営に際して3号墳の一部は破壊を受けた。また、武庫川女子大学考古学研究会が1975年から1979年にかけて実施した測量調査によると、遊園地や貯水施設の建設によって破壊削平を受けた2基の痕跡が確認されている。[41] さらに、地元住民の話によると、八幡山の遊園地の場所は戦時中に小学校の運動場として使用するために削平され、多数の箱式石棺が掘り出されたのである。[42]

現在は、八幡山公園に4基の古墳と2つの陪塚が残っている。4基の古墳はいずれも円墳であり、中央の八幡神社より西南の方向へ3号墳･4号墳･5号墳･6号墳の順番で一直線に並ぶ。4号墳は神社の信仰の対象とされているため、埋葬施設は発掘されていない。3号墳・5号墳・6号墳の埋葬施設は、朝鮮南部の伽耶（かや）の古墳が源流と考えられる竪穴系横口式石室の構造を採用しており、5号墳【図2】の三角持送（もちおくり）式天井は高句麗の古墳に見られる技法で構築されている。[43] 6号墳から出土された土師器高坏は、朝鮮半島に由来する須恵器の形態を模倣したものであり、渡来文化との接触と交流の影響を示す。[44]

【図 2】　八幡山古墳群 5 号墳（2016 年 7 月筆者撮影）

考古学研究者、朴天秀（パクチョンス）が説明するように、古墳時代に朝鮮半島から日本（倭）へ流入した文物について、片方の地域にとって有利に働く一方的な解釈がなされてきたという問題がある。その偏りを乗り越えるために、彼は次のような観点を重要視する。

> …古墳時代中期の倭における伽耶系文物と伽耶地域における倭系遺物の出現背景について、韓国側の一方的な文化伝播の強調と日本側の侵略史観による文化略奪の主張があり、両方とも現在の民族と国家意識に基づいた生産的でない論争が繰り返し行われてきた。このような両方の枠組みは事実関係の検討のみで打破されることではなく、事実をよりよく説明できる新しい枠組みの提示によって代わるべきである。筆者は古墳時代中期における伽耶と倭の歴史的展開をいままでのように一方の立場や論理で説明するのではなく両地域間の交流による相互作用という視点で再検討したい。[45)]

国際彫刻シンポジウムに参加した彫刻家たちが村岡町に滞在したのは、わずか2ヶ月だけだった。一方、シンポジウムには『村岡町誌』（1980）などに八幡山の古墳群に見られる朝鮮半島との交流の影響について執筆した中村典男が、当時の教育委員会事務局代表としてかかわっていた。中村や教育委員会が国際彫刻シンポジウムに関与していたことにより、鄭煜璋は短期間で八幡山に内在する歴史について知ることが出来たと推測できる。

3. 結語―批判的地域主義と地域学の可能性

表面的には、国際彫刻シンポジウムと彫刻フォーラムの結果として残る八幡山公園の彫刻は、贅沢な時代のまちづくりの残存物に過ぎないかもしれない。同時に、村岡高校のような学校で地域に根ざした教育プログラムを実施するようになった現在、鄭煜璋が《1400年後の再会》に採用した地域性へ

のアプローチは検討に値する。

ケネス・フランプトンは批判的地域主義と場所との関係性について説明するために、スイスの建築家マリオ・ボッタが「土地を建てる」という言葉で暗示した方法を引き合いに出している。そして、地域の独特な文化と歴史の作品形式への書き込みについて次のように述べる。

> …建てられた形態の中に、場所の前史、その考古学的な過去と、その後の時の推移を通じての開発と変形とを具体的に示すことができる…（中略）…こうした土地への重層的書き込みによって、場所のもつ固有性はセンチメンタリズムに陥ることなく表現されることになる。[46)]

《1400年後の再会》は、設置された地域に纏わる歴史の一片に言及しているが、それは以上のような重層的な書き込みとは少々異なるように思われる。作品の題名があたかも5～6世紀と90年代の2度の出会いしかなかったような意味合いを内包していることがその原因である。《1400年後の再会》は地域の「考古学的な過去」について見事にとらえているものの、「その後の時の推移を通じての開発と変形」については、見落としているとも言える。しかし、本稿で鄭煜璋を批判することが目的ではない。むしろ、彼が作り上げた地域へのアプローチに、批判的地域主義を踏まえた地域学を通じて書き込みの層を増やしていくことのほうが生産的であろう。

いうまでもなく、鉄道は地域の近代開発を象徴する重要なシンボルのひとつである。兵庫県北部のような中山間地域で鉄道を敷設するためには、幾重も重なる険しい山岳にトンネルを掘る必要があった。そのうち最長で最大の難工事を要したのは1907年から1911年にかけて刳り貫かれた香美町の餘部（あまるべ）駅と隣の新温泉町の久谷駅を繋ぐ長さ1840.1メートルの桃観（とうかん）トンネルである。[47)]また、高低差の激しい地形のため、桃観トンネルの東側の餘部駅では標高が43.9メートルとなり、その次の鎧駅まで長さ310.6メートル、高さ41.5メートルのトレッスル式の余部鉄橋を1909年12月から1911年2月にかけて

建設することとなった。[48)]

久谷駅の近くには、もうひとつの八幡神社がある。そこには、1911年に山陰西線第22工区、桃観トンネルを含む第23工区および余部架橋工事で犠牲となった27人の労働者を慰霊する「鐵道工事中職斃病歿招魂碑」【図3】が工事を請け負った会社の代人や工事に従事した地元住民により建てられた。[49)]犠牲者の出身地は、安芸（1名）、但馬（8名）、大隅（1名）、因幡（1名）、播磨（3名）、肥前（1名）、甲斐（1名）、長門（1名）、備前（1名）、伊予（1名）、肥後（1名）、朝鮮（7名）となっている。[50)]国内外からの労働者が兵庫県北部に集結して、山陰線の工事で亡くなったのである。桃観トンネルや余部鉄橋の工区では、多数の朝鮮人労働者が働いていたと推測されるが、その総数は未だ判明していない。

八幡山公園での地域調査は、90年代の国際彫刻シンポジウムの作品から始まり、その後、古代の文化交流を示す古墳の学習に発展し、やがて、筆者

【図3】 鐵道工事中職斃病歿招魂碑
1911年10月1日建立（2018年5月筆者撮影）

が公園にアクセスするために使用している鉄道の敷設の歴史にまで広がることになった。これら多様なテーマは、全て本稿の冒頭で提起した「地域」という概念の問題に関係する。すなわち、どのように地域のマクロのレベルでの繋がりや関係性を視野に入れながら、地域の微視的な側面を見つめることが出来るだろうか。フランプトンが着目するバクスバート教会における丸天井と、バトラーとスピヴァクが取り上げるスペイン語で歌われたアメリカ国歌は、上述の問いに応えるための兆しを示したところにとどまり、それぞれの事例の有効性は行き詰まりとなっている。というのは、異質な天井構造や外国語で歌われた国歌自体が閉鎖性や排外主義に接続しない地域へのアプローチを保証できるわけではないからだ。

本稿では、批判的地域主義を踏まえた地域学を通じて、地域という概念を巡る特殊性と普遍性の二重拘束を解決する可能性を探るために、鄭煜璋の《1400年後の再会》と文化交流に的を絞った地域調査の事例について考察を試みた。鄭煜璋の作品のテーマには限界があるものの、それ自体を地域学の課題として扱うことにより、その限界を打開する可能性が開かれた。今後、このような事例の可能性と有効性を維持するためには、フランプトンがいう「重層的書き込み」の層を過去、現在、未来にわたって重ねていかなければならないであろう。それこそが地域を対象とした教育が担うべき役割のひとつではなかろうか。

［注］

1） 和田春樹『東北アジア共同の家』平凡社、2003 年、p.43
2） 赤坂憲雄『方法としての東北』柏書房、2007 年、p.181
3） ケネス・フランプトン「批判的地域主義に向けて―抵抗の建築に関する六つの考察」ハル・フォスター編、室井尚・吉岡洋訳『反美学―ポストモダンの諸相』勁草書房、1987 年、pp.40-64 (Frampton, Kenneth “Towards a Critical Regionalism: Six Points for an Architecture of Resistance,” in Hal Foster ed., *The Anti-Aesthetic: Essays on Postmodern Culture*. Bay Press, 1983, pp.16-30)
4） 作者名と作品の題名は英語・韓国語でCheung Wook Jang（정욱장）、*Rendezvous*

After 1400 Years（랑데뷰-1400 년이후）と表記される。

5） この論文は、批評家ハル・フォスターが編集した『反美学―ポストモダンの諸相』（1983）に、ポスト構造主義、ラカン派精神分析、フェミニズム批評、マルクス主義など多様な視座からポストモダニズムの文化的・政治的次元を把握しようとする章のひとつとして収められており、最初から建築専門家以外の読者にも読まれることを前提に出版された。フランプトンは、批判的地域主義という言葉が建築史家A・ゾォニスとL・ルフェーヴルの論文「格子と通路」（1981）に初出したことを認めている。フランプトン、前掲、p.47

6） 同上、pp.41-49

7） 同上

8） 同上、p.52

9） ジュディス・バトラー、ガヤトリ・スピヴァク、竹村和子訳『国家を歌うのは誰か？―グローバル・ステイトにおける言語・政治・帰属』岩波書店、2008 年 (Butler, Judith and Gayatri Chakravorty Spivak *Who Sings the Nation-State? Language, Politics, Belonging*. Seagull Books London Limited, 2007)

10） 同上、pp.42-44

11） 同上、pp.55-58

12） 同上、pp.58-61

13） Spivak, Gayatri Chakravorty *Other Asias.* Blackwell Publishing, 2008

14） 同上、p.214

15） 白永瑞、趙慶喜訳『共生への道と核心現場―実践課題としての東アジア』法政大学出版局、2016 年

16） 同上、pp.349-350

17） 同上、p.1

18） 同上、p.249

19） 同上、p.253

20） 同上、pp.254-256

21） 同上、p.256

22） 地域科学については、ウォルター・アイサード、青木外志夫・西岡久雄監訳『地域科学入門』大明堂、1980 年 (Isard, Walter *Introduction to Regional Sciences*. Prentice-Hall, Inc., 1975) を参照。

23） 山川充夫「地域学と地理学～日本学術会議地域学分科会シンポジウムから～」『地理』62-4、古今書院、2017 年、p.51

24） 岡田知弘「時代が求める地域学のあり方」『地理』62-4、古今書院、2017 年、p.19

25） 『香美町平成 28 年（2016 年）統計資料』、p.5

26）田中哲也・今井一之・山根俊喜・筒井一伸「動き始めた地域系高校(2)「地域探求」というシステム 兵庫県立村岡高校・鳥取大学地域学部」『地理』59-6、古今書院、2014 年 6 月、pp.100-101
27）『創る世界を未来へのおくりものとして―兎塚学びの里“歴史の丘～創造の丘”八幡山公園整備の足跡』福岡区・兎塚学びの里整備特別委員会、1994 年、pp.21-22
28）参加した彫刻家は、マイケル・ケニー（イギリス）、カロリーネ・ラマスドルファー（オーストリア）、ハンス・レインダーズ（オランダ）、ラインハルト・ブックセル（ドイツ）、鄭煜璋（韓国）、石川理（日本）、曽根さわ子（日本）、岩佐ゆく（日本）、田辺武（日本）である。
29）鈴木徹、井田勝己「日本における彫刻シンポジウムの現状 Vol.1」『教育学部紀要』第 30 集、文教大学教育学部、1996 年、p.77
30）同上、p.79
31）1992 年に整備された公園空間は長谷川氏により「創造の丘」と名づけられている。長谷川弘直『心象風景でつくる―ランドスケープ・デザイン』マルモ出版、2006 年、p.55
32）竹田直樹『日本の彫刻設置事業―モニュメントとパブリックアート』公人の友社、1997 年、p.194
33）同上、p.154
34）豊福俊英「村岡町の兎塚・学びの里整備事業」『土木学会誌』79-1、土木学会、1994 年、p.65
35）長谷川、前掲、p.61
36）参加した彫刻家は、前川義春、富長敦也、大井秀規である。1993 年に整備された空間は長谷川氏により「歴史の丘」と名づけられている。同上、p.55
37）1992 年のシンポジウムに参加した 9 名の彫刻家の内 6 名と連絡を取ることが出来た。
38）高校生たちは、2017 年 7 月 25 日に山口県宇部市で 1992 年の国際彫刻シンポジウムに参加した田辺武氏をインタビューした。翌日に広島県広島市で 1993 年の彫刻フォーラムに参加した前川義春氏とのインタビューを行った。
39）鄭煜璋が 2017 年 2 月に村岡高校の生徒に送った手紙による。
40）同上
41）大手前大学史学研究所・香美町教育委員会編『兵庫県香美町村岡 文堂古墳 本文篇 大手前大学史学研究所研究報告』第 13 号、2014 年 5 月 8 日、p.261
42）中村典男「村岡町の古墳」森浩一編『探訪 日本の古墳 西日本編』有斐閣、1981 年、p.271

43）村岡町誌編纂委員会編『村岡町誌 上巻』村岡町、1980 年、p.77
44）中村、前掲、p.272
45）朴天秀「渡来系文物からみた伽耶と倭における政治的変動」『待兼山論叢 史学篇』29 号、大阪大学文学会、1995 年、p.56
46）フランプトン、前掲、pp.57-58
47）徐根植『鉄路に響く鉄道工夫アリラン―山陰線工事と朝鮮人労働者』明石書店、2012 年、p.32
48）同上、p.43
49）同上、p.120
50）招魂碑に刻まれている犠牲者の名前は次の通りである。職斃者：原崎常次郎（安芸）、古屋敷與吉（但馬）、山下亀太郎（同）、次村武義（大隅）、倉田喜蔵（但馬）、谷口幸吉（同）、田中シュン（同）、上田シズ（因幡）、山口宗三郎（播磨）、山田幸次郎（肥前）。病死者：末木慶三（甲斐）、桂セン（長門）、林態太（備前）、国本與吉（播磨）、濱田九郎左エ門（但馬）、三谷鶴吉（伊豫）、秀島亀八郎（肥後）、大呑喜代蔵（但馬）、小林卓次（播磨）、原卓造（但馬）、趙徳彦（朝鮮）、趙敬白（同）、趙敬淑（同）、季致實（同）、朴和善（同）、金英植（同）、曹鉄根（同）。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

The Possibilities of Critical Regionalism and Regional Studies: Fieldwork on Exchange and Negotiation in Northern Hyogo Prefecture

Alexander GINNAN

Keywords: Critical Regionalism, Regional Studies, Kami Town, Cheung Wook Jang, Cultural Exchange

How can one focus on a region without falling into the trap of chauvinism? Should a regional perspective strive towards macro-level universalism or emphasize micro-level specificities? In 1983, architectural historian Kenneth Frampton proposed the notion of a critical regionalism in response to such questions, as a means of mediating between universal and locally particular tendencies in building design. Though critical regionalism has since been considered by theorists beyond the context of architecture, there has been a lack of further development on the critical nature of Frampton's thesis.

In order to engage critical regionalism from a new perspective, this essay will discuss a regional studies project which examined a stone sculpture located in northern Hyogo Prefecture, *Rendezvous After 1400 Years* (1992) by the Korean artist Cheung Wook Jang (1960-). Created during an international sculpture symposium held in the former town of Muraoka (Kami Town), Cheung's work references exchange and negotiation with the Korean peninsula dating back over fourteen centuries. This theme of cultural exchange will be considered in relation to the double-bind of universality and specificity that underlies the concept of a region. While *Rendezvous After 1400 Years* may not provide a resolution to this incongruity on its own, it will be argued that an analysis of this case based on the theories of critical regionalism can point to new possibilities for regional studies and a regional perspective.